



スポーツを通じた人間科学へのアプローチ

人間科学部 二宮 雅也



1977年、宮崎県生まれ。筑波大学大学院修了。(株)関西計画技術研究所研究員、(株)北海道二十一世紀総合研究所研究員、上智大学嘱託講師、稚内北星学園大学専任講師を経て、2010年4月より現職。専門は、スポーツ社会学、身体社会学、健康・スポーツ産業論。スポーツや健康と身体の政治性について研究を展開。また、健康をテーマとした地域づくりやまちづくりボランティア活動についても実践的研究を行っている。

(にのみや まさや)

人間科学部は、「人間の総合的な理解と人間生活の向上に必要な理論的、実践的専門知識と技術を涵養することを目的」として教育を行っている。人間を総合的に理解することは、決して簡単なことではない。しかし、学生にとって身近な文化の1つである「スポーツ」をテーマとすることで、1つの方向性が開ける。ここでは、「スポーツライフ実習」の授業を紹介しながら、人間科学的アプローチの実際を紹介したい。

1. スポーツと社交理論ーゴルフ文化への経験的理解を求めてー

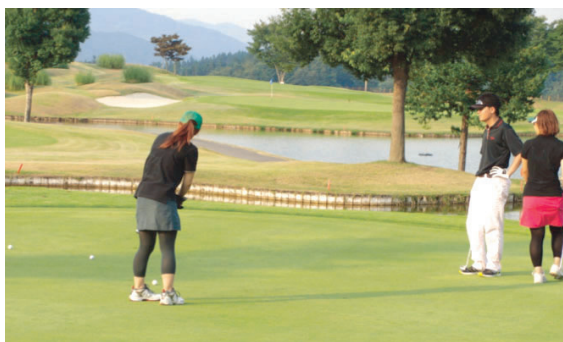
スポーツライフ実習は、理論編と実習編から構成されている。取り扱う種目は、夏季がゴルフ、冬季がスキーである。ゴルフの理論編では、「社交としてのゴルフ」をテーマとしている。

ゴルフそのものはクラブでボール打つという単純な運動によるものであるが、それだけではゴルフは成立しない。ドレスコードやグリーンエチケットをはじめとする様々なマナーの存在は、それを象徴している。ドレスコードに従い、ジャケットを着てゴルフ場に行き、ゴルフウェアに着替え、さまざまなエチケットを守りながらプレーをする。それはクラブでボールを打つスポーツという解釈を遥かに超え、「社会的遊戯」の要素に包まれたゴル

フという文化であることがわかる。つまり、私たちは人が集まってゴルフをするというだけでなく、社会化作用そのものの遊戯性を理解することができる。人間科学領域への理論的展開を考えるならば、「秘密」や「配慮」といった人間世界の微細な振る舞いから「社交」を説明した社会学者G. ジンメルへのアプローチも、このゴルフ文化の学習から地平が開けるのである。

こうした理論を学んだ上で、ゴルフ場での実習を行う。もちろん、周りにはたくさんのアマチュアゴルファーがいる。そうした一般の方々に混じりながら、慣れないゴルフ文化を体得する。どうやってボールを打つのかという技術的側面もちろん大きなテーマの1つであるが、いかにそのステージに立つまでの道のりが長いのか（それ以上に、どんなこ

とに気を配らなければならないのか) を学ぶわけである。ほとんどの学生がゴルフを初めて行うため、当然ながらうまくボールを打つ事はできない。そのような状況下において、周りの人たちに気を配り、さまざまなエチケットを守るということは、打てない悔しさや、上手くいかない苛立の感情をコントロールするという、身を以て学ぶことになる。どのように「社交」が成立しているのか、人間同士の関わりがいかに関係が複雑なのか、まさに「人間の総合的な理解」がテーマになるのである。



スポーツライフ実習（ゴルフ）の様子

2. スポーツ文化と政治的権力性—スノーボードをめぐるせめぎ合い—

冬期はスキーをテーマとする。学生の間では、正直スキーよりもスノーボードをリクエストする者が多い。ではなぜスノーボードではなくスキーを実施するのか。その説明を文化論的に行うのが、理論編のテーマとなる。

特に、事例として扱うのが2010年バンクーバーオリンピックのスノーボード・ハーフパイプ日本代表として活躍した國母和宏の服装問題である。メディアの前にシャツを出し、ネクタイを緩め、腰パンで登場した彼の姿に、その行為を批判する意見が集中した。しかし、それを含めてスノーボードという文化が成立していることは否定できない。そういった文化的特徴を持つスノーボードを、実習の教材として正当に扱う事は、恐らく、スノーボードの技術的指導は可能であっても、文化的教育には発展させることは難しい。

スノーボードは北米や欧州での若者の人気を背景に、1998年長野冬季五輪からスキー競

技の新種目に急展開で採用された。当時の国際オリンピック委員会(IOC)のサマランチ会長の提案によるものである。産業としての成長が止まったスキーの代替として、注目された訳である。こうして、そもそも北米では絶大な人気を誇る高額賞金大会「Xゲーム」(競技会場には大音量でヒップホップも流れる)などの競技が、オリンピックに流れ込んだ。

当然そこで活躍する選手は、賞金獲得を目指すプロのボーダーである。スタイルそのものが、人気を左右する。そうした文脈の上に、スノーボードは存在するわけであり、国母スタイルへと連続するのである。故に、オリンピック種目へと組み込み、無理矢理オリンピック流儀を当てはめられる形になったスノーボードを、さらに教育の場にまで当てはめることは、国母問題以上の問題が想定される。(例えば、学生のスノーボードウェアの着こなしにまで言及するのかどうかを含めて)

こうして、スキーの理論と実践は、雪国での生活のために発展したスキー文化の理解と、雪山遊びから生まれたスノーボードの文化的相互理解として接続され、ゲレンデでのスキー技術的習得を目指した実習に展開するのである。(同じゲレンデを腰パンですべるスノーボーダーを横目でみながら。)人間同士の関わりが複雑さとそこに存在する多様な文化性を解釈することは、目標である「人間の総合的な理解」へと繋がるのである。

3. 人間科学への探求—今後の抱負—

人間の生活は、非常に複雑な文化構成から成り立っている。私たちが生活する世界は、「意味の網の目(文化)」の世界であり、その中で生活が築かれている。日常生活は現実であり、その中でどのように豊かな生活が送れるのかが、人間科学の探究の1つでもある。スポーツは人間が自由になるための、「リベラルアーツ」である。理論と実践の連続性から、スポーツの本質を理解し、スポーツの文化的理解が深まるよう、これからも授業内容を工夫していきたい。